

ハグロトンボしらべ隊をつづけてみたら ～市民参加型調査会から広がる多様な経験と楽しみ～

高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川） 主任学芸員 秀瀬 みのり

1. はじめに

高槻市立自然博物館（以下あくあぴあ芥川）は1994年に高槻市の直営館として設立、2009年に市民活動の拠点に新たに位置付けられ、指定管理者制度による運営が始まった。それまでも自然に関する講座や観察会を実施していたが、継続的な自然観察を通じて、自然を深く知る機会と地域が交流する場を作るため、市民参加型調査会を実施したいと考えていた。当館の周囲では夏頃になると多くのハグロトンボが飛び交う。さまざまな人からアドバイスを受け、2010年にハグロトンボのマーキング調査を市民参加型調査会として開催することとなった。目的はハグロトンボの調査研究例の蓄積と、地域の自然の中で市民自らが発見する経験や参加者との交流により、地域の自然に自ら関わる人を増やし、地域の愛着心を育むこととした。

2010年に手探りの状態でハグロトンボしらべ隊調査会をスタートさせたが、当館の利用者に適応していない対象設定や、調査日の内容設定やタイミング合わないことなど数多くの問題が噴出し、参加者は大変少なかった。市民参加型調査会にするため対象を「どなたでも」に再設定し、参加希望者をとりこぼさないよう、参加者すべての人が調査に参加できるよう工夫を重ねていった。

2. ハグロトンボしらべ隊調査会の概要

1) 実施概要（2024年度）

実施期間：6月から9月（各月2回）と10月（1回）の計9回

時 間：10:00 から 12:00

場 所：あくあぴあ芥川周辺の林と芥川、多目的ホール

対 象：どなたでも（小学3年生以下は保護者同伴）

定 員：40人

申 込：不要、当日会場で受付

参 加 費：無料

あくあびあ芥川周辺に生息するハグロトンボ成虫を対象とした市民参加型のマーキング調査を実施している（図1）。当館の1階入り口前で集合して受付、マーキングするイニシャルのアルファベットを決めて隊員登録をする。調査目的と方法の説明後、芥川周辺の林と芥川（約2km）のルートを回りながらハグロトンボを捕獲しマーキングする。その後あくあびあ芥川の多目的ホールに戻り、それぞれがマーキング個体数の報告と調査で気づいたことなどを参加者と共有して終了する。10月は調査報告会と修了式を行う。



図1 ハグロトンボのマーキング個体

参加者の数は年度で大きく異なるが、のべ参加者数の平均は約160人、登録隊員数の平均は約89人である。

3. 「市民参加」にするための工夫

1) 対象年齢について

初年度はデータ収集を最大の目的としていたために、マーキング作業が問題なくできる年齢を意識し小学4年生以上を対象に設定したが、参加者はほとんど集まらなかった。当時の当館の利用者層は低学年以下の子ども連れが多くなっている時期であり、参加したいけどできないという声は多かった。2年目からは対象を「どなたでも」とし、だれでも参加しやすい、敷居の低い調査会にすることを第一に考えることにした。

2) 広報について

初年度の状況から、参加者を一人でも多く集めることが大きな課題であった。スタートした2010年から2013年までは行政の水辺活動事業の一環としてハグロトンボしらべ隊調査会が関わっていたため、行政が主催する市内のイベントに参加して、積極的にPRした。市内外へチラシやポスターの配布も協力していただいた。当館に依頼される小学校の出張授業やクラブ、学童などの活動でもハグロトンボのマーキング調査を組みこみ、体験する機会をできるだけ多く作った。「生物調査は専門家だけが行うものではなく、だれでも方法を知ればできる。みんなで芥川のハグロトンボのことをしらべよう」と伝え続けた。

調査会のお知らせや隊員募集の他にマーキング個体の報告を普及するチラシやポスターを作成し、市内小学校や周辺の住宅に配布した。マーキングしたハグロトンボに気づいた人がハグロトンボしらべ隊調査会の参加に結び付くことを期待したものだ。

3) 定員について

行政との連携により当日スタッフの数は多く確保できていたため、万が一多くの参加者がいても対応できる状態だったこともあり、定員を設けないことにした。コロナ禍ではコロナ以前の参加者数の約2倍の申込があり、安全管理が不十分になる恐れがあったことから、やむなく定員を設けることとなった。

4) 申込について

当館のイベントは電話申込が基本だが、本調査会では、当日に来館した人が参加しやすいように申込不要とした。スタートから2年目までは隊員登録する研修会を初回に設けて、調査会に参加するためには、研修会に出席しなければならないルールにしていたが、参加者が集まらなかったこともあり、その後隊員登録と調査会を毎回実施する体制となった。

また、調査会の日以外でも隊員登録を事務所で受付できるようにした年もあった。

5) 道具の工夫

当館の利用者層の様子と実際の利用者の声により、低学年の子どもが周囲に手伝ってもらいながら、一人で作業ができるレベルにする必要があると考えた。調査用紙はA4サイズのバインダーに挟んでいたが、小さな手でも持ちやすいB6サイズのファイルに変更した。調査用紙の内容は丸付けで記録できるようにした。資料については文字をできるだけ少なく、イラストや図を多く取り入れることによりわかりやすくなるように作成した。マーキング用のペンは、ペン先が極細タイプのものがハグロトンボ個体への負担は少ないが、子どもが扱うとハグロトンボの翅をやぶってしまうことが多かったので、少し太いペン先のものに変更した。未就学児が参加する場合は必ず保護者が同行するため、マーキング作業は保護者が手厚くサポートするので参加に支障をきたす状況にはなっていない。また子どもが採集し保護者が記録をする役割分担がよく見られるが、こうした親子の共同作業は満足度が高いように見える。

6) 調査結果の共有

市民参加型調査でわかった調査結果が参加者に共有されることは当然であるが、調査会日程の終盤に組み込んでいる調査結果報告会がある日は、参加者が少ないことがよくあった。野外活動だけでなく調査結果を意識してもらうために、2013年からは毎回のマーキング調査後の報告会と共に、生息地マップを全員で作成し館内に展示するようにした(図2)。コロナ禍で屋内活動が制限された時期では、報告会と生息地マップ作りができなくなったため、現在は各



図2 生息地マップ作成のようす

個人に1枚地図を渡し、自分だけの生息地マップを作り持ち帰っている。そして、10月の最終回では、年間の調査報告と同時に修了式を行う。修了式では調査をがんばった隊員の表彰式を行っており、修了式を楽しみに調査会に継続して参加する親子も少なくない。

4. 参加者にとっての楽しみ

ハグロトンボしらべ隊調査会の参加者は未就学児から高齢の方まで、市内外からさまざまな方がいる。調査会の参加者が何を目的にして参加しているのかを知るため、修了式でのアンケートと、聞き取り回答を行ったことがあった(図3)。

子どもの参加者からの回答は、調査会に参加して初めてトンボを採集できるようになってうれしい、調査会中にであうハグロトンボ以外の生き物に関する感想が多かった。一方で子ども連れの保護者では、子どもが喜ぶ姿や成長する姿を感想にあげる人がほとんどだった。自分の楽しみより子どもの反応や気持ちを重要視しているようである。大人単独の参加者について、健康のために参加しているという意見がいくつか見られた。林や川の中をみんなで歩くことは程よい運動になり、自然と親しみながら活動することで楽しく継続できると書いてあった。童心に還ったようで楽しいという意見もいくつか見られた。年齢などバックグラウンド関係なくさまざまな人が、共通のテーマに元に集まり、交流できることが良い、楽しいという回答複数あり、参加者同士のコミュニケーションを楽しみに参加している人が、年齢に関わらずみられたことも印象的だった。

他にも、当館周辺の芥川沿いは野鳥観察がしやすい環境であるために、バードウォッチャーが多く、偶然にマーキング個体の写真を撮影して報告してくれることも多い。調査会に参加はしないが、ハグロトンボの時期にマーキング個体を見つけて撮影した写真を報告することを毎年楽しみにしている人もいる。マーキング個体の撮影をきっかけに、他のトンボにも興味が広がり写真撮影を始めたという人もいる。

トンボの調査会という博物館の行事において参加者がそれぞれの日常と重ね合わせて、楽しみながら参加していることと、その楽しみが予想以上に多様だったことは新たな発見だった。調査会の活動やそこに集う人とゆるやかにつながり、心地良い居場所になっていることを実感した。



図3 ハグロトンボしらべ隊調査会 参加者の感想

5. ハグロトンボしらべ隊調査会から広がる経験

1) あくあびあの部活「ハグロトンボしらべ隊」へ

ハグロトンボしらべ隊調査会は隊員登録すれば、参加はいつでも自由である。1回きりの参加が多いが、2013年頃から継続して調査会に参加するリピーターが見られるようになっていた。そうしたリピーターが初参加者の調査をサポートし、スタッフの手伝いをする雰囲気は自然と作られていた。こうした現状を受け、市民が主体となって活動できる場にしていくことができないかと考え、2014年に当館のヒト、モノ、場所をより多くの人に利用してもらうため



図4 部活での幼虫調査のようす

「あくあびあの部活プロジェクト」をスタートさせた。あくあびあの部活「ハグロトンボしらべ隊」を結成し、調査会のリピーターに声をかけたところ、快く部員に加入、いつもの調査会に参加する以上の活動を市民とともに考え活動できる環境が整った。

部活になってからの調査会は、「部活動」に位置付けられた。部員は調査会で「ハグロトンボしらべ隊リーダー」の役割を担い、マーキング調査の指導や安全管理など調査会の運営をサポートしている。さらに家族単位で入部しているケースが多いため、小・中学生の子どももリーダーとして活躍している。ハグロトンボしらべ隊調査会の最後のまとめは、子どもリーダーが進行役をしている。調査会後のブログ報告文の作成や、まとめ地図の展示作成をしてもらったこともある。本人たちにとっては参加する楽しみや自信につながり、子どもリーダーの保護者からは、子どもにとって良い経験になると評判である。一方で、調査会以外の日も積極的にマーキング調査を実施している部員もいる。収集したデータは当館へ報告されるが、最近では個人でデータ整理や解析を始めている。

部活動を機に新たな活動としてハグロトンボの幼虫調査を2018年からスタートさせている。ハグロトンボの幼虫調査は毎月1回実施し、成虫のマーキング調査をしない時期も部員が集まるようになった。部活の幼虫調査活動をきっかけに、ハグロトンボしらべ隊に新たに入部した人もいる。

2) あくあびあの事業の中で「つなぐ・つながれる」場所として

あくあびあのおはなし会やみんなのワークショップに参加する子どもたちが、少し成長して初めての自然活動として参加する場にもなっている。また、当館で初めて参加するイベントがハグロトンボしらべ隊調査会という人が、当館の他のイベントへ参加し、博物館の利用者としてリピーターになることもよくみられる。

毎回の調査会の終わりには、調査中に見つけたハグロトンボ以外の生物を必ず報告してもらおうようにしている。ハグロトンボの調査を通じて芥川の生態系を知り、興味を持つことは重要なことであり、調査会参加の経験から身につけてほしいことの一つと考えている。

だれでも参加できるハグロトンボしらべ隊調査会を入口として、当館の他の活動ともゆるやかにつながり、参加者の興味を次へつなぎ、自然への深い理解や新たな経験へ導くことを目指していきたい。

3) ハグロトンボしらべ隊調査会に参加した子どもたちのその後

ハグロトンボしらべ隊調査会を始めた頃は小・中学生だった元・子ども参加者が大学生や社会人になって再会する機会が増えてきた。中でも理系・生物系の大学に進学した人と報告しにきた人が数人いる。2015年からコロナ前まで、市内中学校の自然科学部が毎年参加していたことがあった。この中学校のクラブ活動がきっかけで当館を知り、大学生になって当館の活動に関わっている人もいる。また中学生の頃に参加したハグロトンボしらべ隊調査会がきっかけで、学芸員を目指していると博物館実習に来た人もいる。

調査会の経験が個人の中でどこまで影響しているかを計り知ることができないが、関わったことがある子どもたちが成長する姿は成果の一つであると考えている。

6. さいごに

ハグロトンボしらべ隊が部活になった現在は、調査会を長く経験してきた部員のサポートにより、参加者が持つさまざまな思いや目的を尊重しながら、調査会を実施することが可能となった。博物館の特性を生かしたコミュニティが居心地の良い場所となることは、自然や生物に触れる経験や関心をもつ人が増えることに加え、各個人にとって日々の生活の楽しみとして、博物館が身近な存在になることが期待できる。

2010年から参加者と共にゆるやかに変化しながら、誰でも参加できる市民参加型調査会として実施してきたハグロトンボしらべ隊だが、ここ数年は参加者が少ない傾向である。ハグロトンボが最も活動する夏の時期は近年猛暑日が続き、イベント参加者の低年齢化が顕著にみられている近年において、野外での活動がますます難しくなっていることが理由にあげられるだろう。今後は日数を減らして継続する予定である。

ハグロトンボしらべ隊調査会のさらなる普及と、誰もが参加できる居場所を絶やすことなく継続するとともに、その先のさまざまな経験につながるコンテンツについて博物館内外を視野に入れて増やしていくことが今後の課題である